

## シロクラベラの幼期の形態と海草藻場への出現

金城清昭 (沖縄県水産試験場八重山支場)

【目的】 イラ属魚類の幼期の形態や生態に関する知見は少ない。本研究は沖縄県の沿岸重要資源であるシロクラベラの幼期の形態を記載し、海草藻場への季節的な出現状況を調べ、本種の生態の一端を明らかにすることを目的とした。

【方法】 1984～1991年に沖縄島北部の屋我地島沿岸の海草藻場とその周辺で潜水観察と曳網採集を月1～3回の頻度で行った。潜水観察は岸から沖へ海草藻場を横断する1,000mのラインを3本設け、SCUBA潜水でラインの両側に観察される幼魚を計数して記録した。227回の観察に、観察距離226km、のべ373時間を費やした。曳網採集は各ラインの岸側の藻場とその周辺で人力で行った。約30mを1回の曳網として各々の場所で1～5回、計795回曳網した。

【結果】 全長7.4～132.1mmの幼稚魚が109個体採集された。全長7.7mmの稚魚の体は細長く側扁する。色素は乏しく、下顎先端、鰓蓋下の体正中線、臀鰭第1棘と鰭膜に黒色素が、脳、鰓蓋下端、鎖骨上、腹鰭基部、臀鰭第1棘の基底と棘および鰭膜、臀鰭最終軟条の基底に赤色素が、また黄色色素が臀鰭第1棘の基底から肛門周辺にみられる。全長14.9mmでは体高が増し、頭部は丸く、鱗もみられる。背鰭と臀鰭の各前端から最終軟条の後方に各々4つの黒色素群が分布し、頭部、腹鰭、尾柄と尾鰭軟条上にもみられる。同属のイラの稚魚の黒色素パターンと類似する。潜水観察では幼魚は概ねどの年も6月からみられ、7～8月にピークとなり、9月以降漸減して1～4月はほとんどみられない。ライン上での分布は6～8月には岸寄り、その後ライン全体に広がり、沖寄りの分布を示す。曳網採集では幼稚魚は5月から得られ、6～7月がピークで10～4月にはほとんど採集されない。採集個体は月とともに大型化する。以上から6月頃までに海草藻場に

来遊したシロクラベラの幼稚魚は、夏場を藻場やその周辺で過ごし、その後成長にともない藻場を離れて沖へ移動するものと考えられた。

(平成5年度日本水産学会秋季大会 講演要旨)